

# 欲望の現在形

貞包 英之

我々の欲望は現在いかなるものなのであろうか。本論は、幾つかの異なる資本の変態形態にあって、欲望がいかに稼働しているのかを明らかにする事を通じて、我々の欲望の現在形を探り出そうとするものである。そこには、交換価値と使用価値の二つの価値がそれぞれ自律的に変態していく商人資本のパラレリズム、商品という一つの「不可能」な視点が登場する産業資本のフェティシズム、そしてモノと我々の欲望の相互「模倣」の中に我々の欲望が閉じ込められてしまっている消費社会のファンタスマゴリーという三つの欲望形態が現れる事になるだろう。

## 1. 問題設定

我々は現在いかなる欲望を抱き、その下でいかなる生を営んでいるのか。本論は現在のこの我々の社会において、そこに躍動している欲望という事実を確認する事を目的としている。社会は、主体としての我々が作り出す心的イメージでも、また固有の客体として存在する構造でもない。それは、主体としての我々を貫通しながら、或る種の構造・制度・文化という物質的・非物質的形象を作り上げていく幾多もの欲望の蠢く場なのだ。今までの所多くの社会記述はこのような欲望の存在という事実を、なおざりにしてきたように思われる(1)。例えば、或る面では我々の現在の生の事実を的確に捉えているJ・ボードリヤールは、「物の体系」という記号的体系の中にこの欲望の問題を消失させてしまった(2)。また、欲望の稼働の条件としての社会内の諸階層体系を浮き彫りにしたP・ブルドゥーは、個々の主体の内に存在するハビトゥスなる構造にこの欲望という事実を回収して

しまったように思われる(3)。そして、何よりも現在興隆を見せつつあるカルチャラル・スタディーズは、実証的な歴史記述の厚みの中に、その歴史そのものを支える欲望という特異な存在を埋没させてしまっているようなのだ(4)。

欲望とは、我々が生きるこの世界で出会う主体・制度・文化という幾つかの経験的形象そのものを形成し、我々に我々の経験可能性そのものを与える力である。そして上記の幾つかの社会記述が取り逃してきたのは、欲望のこのような力動性なのであるが、しかし、幾ら欲望が力動的であると言っても、それは何ら秩序なく活動しているわけではない。欲望の稼働にも幾つかの論理があり、幾つかの形態がある。まずこのような欲望の幾つかの形態を弁別化し、欲望の現在形を浮き彫りにする事、それが本論に賭けられている事であろう。

このような課題を設定する時、まず重要なのは欲望の現在形が現れているその地平を明らかにする事である。その一端をおそらく我々には下に挙げる小島信夫の『抱擁家族』の一節の中に見ることが出来るだろう。

「三輪俊介には小さいものだが、それでも強い自由があった。一つ一つの買物をしているとき、そこへ歩いて行くとき、そういった店の男や女の店員と話をかわしたりするとき、ふと通り過ぎる人の顔におどろいたり、よく茂った濃い緑の樹木と葉を見るとき、ふと頬をかすめて風が吹いて行くとき、車の通らない意外に静かなビルのかげに入るとき、何か生きているという自由感があった。

「私の妻は病気で。とても危ないのです。その夫が私です」

前にはおなじことを、俊介は外へ出ると口に出して叫びたかったことがあった。今では、助けを求め、「私どもは仲間です。不安定な苦しみの多い人間です。私は買物をしている人間ですが、どうか、ただの買物をしている人間と思わないで下さい。私は人間としておつきあいたいし、今こうして声をかけているのです。私どもは見ず知らずの間柄です。しかしそうでないと駄目なんです。だからこそ友達なのです。」

俊介は表立っては何もいわず、買物をしているときに、心の底でそう叫んでいるのは、どうしてだろうか。なぜ買物をしている相手に対して、とくにそうなるのだろうか。」(小島[1988: 156])

ここでの主人公俊介の「生きているという自由感」はいかなる所にあるのか。それは買物という商品購買の場である。我々は通常疎外論＝物象化論的観点から、買物という商品の場を、生の地平から「疎外」された場だと考えがちである。もし我々の日常の生活が、今なお買物の外部に確固として存立するものとするならば、その認識も間違いではないだろう。だがこ

の『抱擁家族』の主人公俊介には、そのように「無垢」な生活の場は与えられてはいない。彼にとって寧ろ買物という場こそが「ふと頬をかすめて」いく「風」を感じ、「生きているという自由感」を獲得し、「見ず知らずの」人間と「人間としておつきあい」出来る最も「人間」的な場なのである。

この『抱擁家族』の一節が我々に或る種のリアリティを与えるものだとするならば、我々の現在の「人間」的な生活とは、そもそも買物という場、或いはそれを貫く資本の力によって支えられ、形成された何ものかではないかと考える事が出来るだろう。そこまでの極論をまずは避けておくとしても、とにかく現在の我々が生きる地平において感じている欲望を、資本の力とまったく切り離して考える事が不当である事だけは間違いない。欲望の現在形、それを考えるに当たって資本という力は欠かす事の出来ないものなのである。

そもそも資本の運動と我々の欲望の稼働とは、判明に弁別されがたく絡み合ったものである。資本というものが、諸々のモノが関係を結び相互に移転されていく、その変態過程そのものを意味しているとするならば、総てその変態は我々の欲望を契機として発動しているのであり、また逆にそのような資本の変態は我々が欲望を稼働させる際の条件を形成している。このようにして資本の力と欲望の稼働が相互に規定し合い織りなして行くその或る種の秩序を資本の変態形態と呼びならわす事が出来るだろう。

であればここで我々が分析すべき事は、この資本の変態形態がいかなるものであるのかを明らかにする事であるのだが、このような研究をなした一人の先駆者として、あのK・マルクスが挙げられよう。彼が行った所謂経済学的な意味での資本分析の背後には、我々が大いに参考

とすべき欲望と資本の形態学というべきものが隠されているのだ。それ故我々の議論は、マルクスの考察を出発点として始められる。欲望にも幾つかの歴史がある。幾つかの欲望の形態学、そのようなものを行った後に、初めて我々は欲望の現在形を見定める事が出来るようになるだろう。

## 2. 商人資本のパラレリズム

マルクスは産業資本的世界の（歴史的、或いは論理的）外部に、商人資本という資本の変態形態を見出した。まず我々はそれがどのようなものであるのかを確認していきたい。彼はこのような記述をしている。

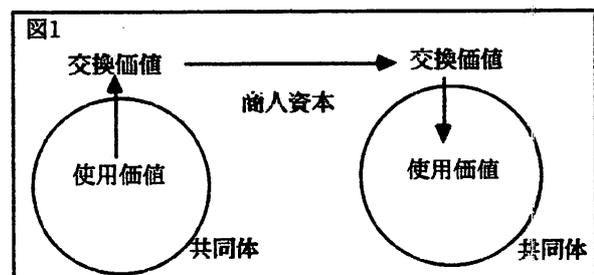
「商業資本が未発展な共同体のあいだの生産物交換を媒介するかぎりでは、商業利潤は、詐欺瞞着のように見えるだけではなく、大部分は詐欺瞞着から生まれるのである。商業資本がいろいろな国々の生産価格のあいだの差額を搾取するという（そしてこの点では商業資本は商品価値の平均化と確定との方向に作用する）は別としても、あの生産様式のもとでは、商人資本が剰余生産物の大半をわがものにするということになる。そうなるのは、一つには、商人資本を自分たちのあいだの仲介者とする諸共同体の生産がまだ本質的には使用価値に向けられていて、これらの共同体の経済的組織にとっては、およそ流通にはいる生産部分の売るということ、したがっておよそ生産物を価値どおりに売るということは付随的な重要さをもつだけだからであり、また一つには、あの資本主義以前の生産様式では、商人の取引相手になる剰余生産物の主要所有者、すなわち奴隷保有者や封建領主や国家（例えば東洋の専制君主）が享樂的富

を代表しており、この富を狙って商人がわなをしかけるからであって、・・・。」(Marx [1962～1964=1972b:32])

マルクスの言う事をまとめて見よう（以下図1参照）。共同体において、モノは直接的な目的を持ったもの、すなわち使用価値として作られている。商人資本が、それを他の共同体に移転する事が出来るのは、只それが剰余生産物である限りである。しかしここでの共同体と商人資本との取引は、等価交換によって行われているわけではない。ここで移転されるモノが剰余生産物に過ぎない以上、共同体はそれが等価に「交換」される事に「付随的な」関心しか持っていないのだ。

であればここで行われている事は、そもそも「交換」と呼び得る何ものであるのだろうか。或るモノが渡され、或るモノが与えられる。だが共同体はそれが「価値どおりに」行われる事に関心を持たない。「交換」という語を、あくまで厳密に或る正当な代償と引き替えに行われるモノの移転関係として規定しておくならば、ここで行われている事は明かにそう呼ばれるべきものではないのである。であれば「価値どおりに」行っているのではないモノの移転関係をここではひとまず「贈与」と呼んでおく事にしておこう(5)。

「価値どおりに売る」事が重要ではない移転関係、それは我々の目から見ると奇妙なものに



見える。しかし共同体はモノを使用価値としてしか眺めていない以上、それはまた当然の事なのである。「富の素材的内容」(Marx [1962~1964=1972a:73])として何らかの有用性を持つ特異な「質」の事を意味する使用価値(Gebrauchswert)とは、慣習的に「価値(Wert)」という語が使われているとしても、寧ろそれとは対立する何ものかである(6)。であれば使用価値としてモノを生産する共同体が「価値どおりに売る」事に関心を持たないのも当然だろう。彼らは端的に「価値」などというものを知らないのだ。共同体の内にあるのは、それ故、只或る使用価値が別の使用価値へ直接的に「変質」する事、すなわち「贈与」のみなのである。

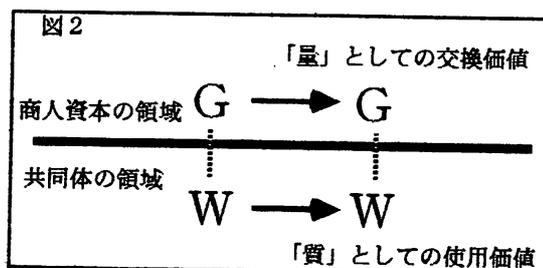
共同体は、このように「贈与」によってモノを取り扱う。では商人資本はどうか。それが関心を持つのは、ただそれを時間・空間的に異なる共同体に運び、交換価値の差額を得る事のみである。それ故、商人資本にとってはモノはただ交換価値としてのみ現れるのであって、その交換価値の「素材的内容」を構成する使用価値など彼にとっては何の重要性も持たないものなのだ。

このような交換価値は、極めて奇妙な「価値」である。それは使用価値と「交換」される事を目的としない、ただそれだけの「価値」であるのだ。では「交換」を目的としない「交換」価値とは一体何を意味しているのか。使用価値が個物が有す特異な「質」を意味するとするなら、交換価値とはその「質」を媒介する「量」であるとまずは言えるだろう(7)。このように「質」と「量」との関係から使用価値と交換価値の関係を考えていくならば、「質」なしの「量」というものなどがあり得ない事は自明である。にもかかわらずここでの交換価値は「質」としての使用価値への変態を欠いた純粋な「量」として現れているのである。それ故、

ここでの「量」としての交換価値は「質」を欠いた或る純粋「量」であると言うしかないのである(8)。そしてこの純粋「量」としての交換価値は、「質」という外部を保有していないがために、只自らの内でそれ自体として高まるしかないものなのである。

以上まとめるならば、商人資本の世界とは、使用価値と交換価値の平行な変態過程から形成された図2のような二つの交じり合わない視点、そして一つのパラレリズムから成り立っていると見えるだろう。商人資本の領域は交換価値からのみ構成されている。その欲望は外部をもたず、ただ自らの内で「量」を増加させていく事だけにある(G→G)。逆に共同体の領域は「質」としての使用価値からのみ構成されている。そこではモノは或る使用価値から別の使用価値へ直接的に「変質」するだけなのだ(W→W)。

俯瞰する一つの超越的な視点から見下ろすならば、共同体と商人資本は、同じ一つのモノを媒介として交流しているようにも見えるだろう(G...W)。しかしこの世界では、それぞれ使用価値、交換価値としてモノを把握する共同体と商人の視点のみが存在し、それを一つに統合する超越的な視点など何処にも与えられてはいない。それ故ここでの商人資本と共同体との取引を、マルクスのように「詐欺購着」的だと批判する事は実は出来ない。両者の間に広がる絶対的な断絶は、両者の経験を騙す、騙されたとい



う一つの関係に通約する視点をどこにも許しはしないのだ。

これらの事はまた商人資本が世界を完全には支配し得ない資本である事も意味している。商人資本は、只共同体間のモノの移転を媒介するだけで、その生産に関しては共同体に委任したままなのだ。商人資本にとって共同体の世界は、只時に使用価値を「贈与」してくれるだけの闇の奥の別世界であるしかない。つまりはここで世界は商人資本の世界と、共同体の世界という断絶した二つの世界から構成されているのである。

この時、商人資本的世界の欲望とは外部から切り離されたまま、ただ自らを「変質」させていく欲望であると言える。その意味ではこの欲望は自らの内に留まる「自律」的な欲望であり、それはこれから見る産業資本的欲望が、モノの生産を支配し世界そのものを変革しようとする強迫的欲望であるのとは全く異なっているのだ。

### 3. 産業資本のフェティシズム

商品の登場。それが商人資本の世界と産業資本の世界との構造的断絶を画す最も明確な指標である。商人資本の世界には商品はなかった。そこにあったのは、それぞれ使用価値、或いは交換価値としての別個のモノでしかなかったのだ。このような二つのモノを、一つのモノとして眼差す視線が現れたという事、それが商品の登場が意味する事である。

商品とは何か。マルクスはそれを使用価値と「価値」の二重物であると言っている。

「商品は、使用価値または使用対象であるとともに「価値」なのである。商品は、その価値が

商品の現物形態とは違った独特な現象形態、すなわち交換価値という現象形態をもつとき、そのあるがままのこのような二重物として現れる」(Marx [1962~1964=1972a:115])

特異な「質」としての使用価値と純粹「量」としての交換価値は、商人資本的世界においては相互に交じり合わない二つの変態を形成していた。それが或る一つのモノの中に折り重ねられた時、商品が現れる。ではこの商品はいかにして作り出されているのか。それはあの商人資本的世界にはあり得なかった「交換」という行為によってであろう。

Aというモノを所有している或る者がいるとしよう。彼は今或る他者が所有するBというモノを欲している。彼が「詐欺購着」を行ってではなく、Aという代償を支払って、それを「正当」に手に入れる時、ここに「交換」という行為が行われているのだと言う事が出来よう。つまり或るモノに対して正当な代償、すなわちそれに似合った「価値」を与える事こそ「交換」という行為の核心を成すものなのである。この時「価値」とは「二つの違った物」、すなわち異なる使用価値に共通すると想定されている「第三のもの」(Marx [1962~1964=1972a:75])を意味しているとまずは言えよう。そしてその固有の使用価値と共にこのような交換において現れる「第三のもの」を内在させているモノこそ、商品と呼ばれるものなのである。しかし「本来」的には個々に特異な「質」としての使用価値に共通する「第三のもの」など存在するはずはない。ここに「交換」或いは商品の不可能性が受胎する由縁がある。結局「交換」とは「価値」という不可能な何かを前提とした「本来」的には不可能な振る舞いであり、また商品とはそのような「交換」によって産み出される

不可能な何ものかであるのだ。

しかしここでの「本来」的とはいかなる事を意味しているのか。それはあくまで個々のモノに異なる「質」がある事を前提としての「本来」性に過ぎない。確かに先の諸共同体にとってはその前提は正しかった。しかしそれがいかなる世界においても正しいというわけでもない。世界構造が転覆し、そのような「本来」性が消える時が来るならば、逆にこの共同体的思考こそが、非「本来」的なものになってしまう事だろう。

そしてここ産業資本の世界では、このような「本来」性は転覆してしまっているのである。この世界では「二つの違った物」に共通すると想定される「価値」こそが自明なものなのであって、寧ろ「質」としての使用価値は思考不可能な何ものかとして立ち現れてしまう。もう一度「交換」の過程を追ってみよう。Aというモノが、Bというモノと「交換」される。交換価値は確かにこの時その存在が想定されざる得ないものだ。しかし使用価値の存在は少なくともこの「交換」という枠組みの内では想定される必要はない。Aというモノはまず、その所有者にとっては使用価値を何ら有していないだろう。であるからこそ彼はそのAを手放したのだ。ではBの使用価値はどうか。その使用価値は確かに、Aの元々の所有者に手渡される。しかし不思議な事態がここに起こっている。使用価値とは、等価性に還元されない特異な「質」であったはずだ。しかしここでAの所有者が手にしているのは、「交換」によって「価値どおり」に与えられた使用価値でしかないのだ。つまりはこの時Bの使用価値は「価値」によって媒介された使用価値ならざる何ものかへと変貌してしまっているのである。

このように「交換」という枠組みの中では、

使用価値とは絶対的に現象し得ない何ものか (etwas) でしかない。しかしまた同時にこの時使用価値が、「交換」に何の機能も果たしていないわけでもない。「交換」の直前、Bには確かに「交換」を始動させる何らかの使用価値が想定されていた。また「交換」が終了し、その「交換」という起源が忘れられた後には、Aの元々の所有者の手の中には特異な「質」としてのBの使用価値が保有されている。「交換」という枠組みの内部ではそれは絶対的に現象し得ない何かであるとしても、その枠組みの外部では、使用価値はこのように起源、或いは目的として寧ろ存在する事が要請されざる得ないものなのだ。「交換」の行われる時、使用価値はこのような矛盾した構えの中におかれている。

このような「交換」の構造こそが、我々をフェティシズムへと導く事になるのだが、ではフェティシズムとは一体何なのであろうか。我々はそれを物象化論的な枠組みとは別の仕方考えたい。物象化論は「価値」というものを、我々が社会的な営みを送る中で形成する「一種独特の「関係」すなわち「歴史的協同連関」が或る实在物として「物象化」された、「本来」的には不可能な何ものかであると考え<sup>(9)</sup>、物神性 (フェティシズム) というものをこのような「価値」を物が担ってしまう事態そのものとして規定する。しかしこのような論理構成が取られる時、ここで物象化以前に存在するとされる「関係」は、失われた起源として「価値」の存在を支える或る規定不可能な所与の事実になってしまう。

つまりこのような規定不可能な何か (etwas) を要請する物象化論的論理構成は、「交換」の外部に、その失われた起源・目的として使用価値を設定する「交換」の体制そのものの思考と同形のものと言わざる得ないものなのである。

「交換」の枠組みはその構造的な剰余として、使用価値という失われた外部の存在を要請していた。物象化論の枠組みが要請する「物象化」に時間的・論理的に先行する「関係」という概念は、この「交換」の枠組みが使用価値に与えている論理的ポジションを反復してしまっているのだ。

我々は寧ろ思考不可能なものとして使用価値を思考する事が要請されてしまうこのような思考構造そのものを、フェティシズムという概念で呼びならわしたい。問題は或る自然的な「関係」が物象化されている事ではなく、寧ろそのような自然的関係が想定されてしまう事自体にある。この時フェティシズム的欲望とは、「物象化」(規定)された何ものかと「物象化」(規定)されざる何ものかとを或る一つのモノの中に統合させる視線の形態であると言えるだろう。つまりこの欲望は、或る規定された事実の内に、その失われた起源、しかし定義上辿りつく事の出来ない無規定な起源を垣間見る欲望なのである。このような意味で、起源としての「関係」という概念を求める物象化論的思考は、フェティシズム的欲望そのものを反復する思考そのものであると言えるだろう。

そしてこのようなフェティシズム的欲望によって或るモノが捕捉される時、そのモノは規定可能な交換価値と規定不可能な使用価値とを同時に保有するモノとしての商品となるのであって、このような意味において商品とは使用価値と「価値」の二重体だと言えるのである。そしてこの商品という存在が、或る移転関係を取り結ぶ時、そこに産業資本の変態と呼ばれるものが現れるだろう。具体的に考えてみよう。産業資本の変態の原動力的役割を果たす剰余価値は、資本家が労働力商品を交換価値として買い、それを使用価値として使う事によって産み出さ

れている。「不当」な「搾取」がここで行われているわけでは決してない。労働者にその労働力の「正当」な代償としての交換価値が一旦与えられたならば、その商品の使用価値を使用する権利は当然その購買者たる資本家に属している。そして資本家は、ここで彼に委ねられた使用価値の規定不可能性を利用して無規定＝無制限な「譲与を産み出そうとするのである。

つまり剰余価値の源泉は、労働力商品という一つの商品の中に規定可能な交換価値と規定不可能な使用価値とが同時に折り込まれているというフェティシズム的構造そのものにあるのであって、或る個別の資本家の「不埒」な振る舞いの中にあるのではないのだ。結局商品の中に折り込まれた使用価値という規定不可能な深さが、資本家というポジションに立つ人間の欲望を誘い込み、商品の生産へと導くのであるから、ここでは資本家とはフェティシズム的欲望に捕らわれた或る種の者の事を意味しているに過ぎないのである。

そして資本家がこのようなフェティシズム的欲望によって商品を生産して行く時、労働者の欲望もまた無垢なものとはなり得ない<sup>(10)</sup>。労働者とは何者か。それは自らを商品として売り払う事で賃金を獲得し、それによって自らの生活手段を購入する(正確には、せざるえない)者の事である。彼は労働を行い、使用価値を作り出すのだが、それを直接手にするわけではない。彼は、自らの労働力と「交換」された賃金を、さらに「交換」する事によってでしか自らの作りだした使用価値に辿りつく事が出来ないのだ。

この二重の「交換」行為が、不可避免的に彼をフェティシズム的欲望へと導くだろう。確かに彼は「質」としての使用価値を作りだした。しかし彼はその労働によって獲得された賃金によ

って、それを手に入れなければならないのだ。この彼の欲望は辿りつく処がない。彼が手に入れようと欲している使用価値とは「交換」の絶対的な外部の何ものかではないからである。彼の欲望もまたここで規定不可能な外部としての使用価値に取り憑かれたフェティシズム的なものと化してしまっているのだ。

そして円環は閉じられる。資本家はそのフェティシズム的欲望に従い商品を生産する。そして生産された商品は、労働者によってフェティシズム的に欲望されるが、その欲望は原理的に終わりが無い。それ故今度はその労働者の欲望めがけて、資本家は商品を生産し、労働者はそれを購買するために再び自らを商品として売り払っていただくだろう。(図3参照。)

これが産業資本の変態過程の総体である。商人資本の世界では、交換価値と使用価値は二つの相交わらない流れを構成していた。今やこれらの変態は、一つのモノ、すなわち一つの商品の内に統合され、一つの資本の運動を形成し始める。それは結局共同体が資本の運動に貫かれ始めるという事を意味している。商品という視点の成立は、共同体が或る固有な「質」としての使用価値を保有するための独自の視線を奪ってしまったのだ。ここに資本による世界の全体化の運動が成立する。商人資本的世界の内では、共同体の世界は資本にとって絶対的な断絶の向こう側の闇の世界であった。今や商品の登場と共にそれは、商品を産出する生産過程の場

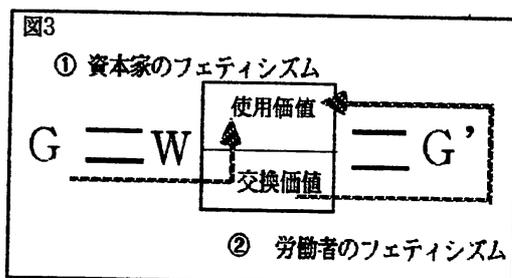
として資本の眼前に立ち現れたのである。この時資本は共同体に侵入し、それを自らの内に取り込み解体しようとし始めるだろう。

このような形でフェティシズム的欲望は産業資本の変態を貫いているのだが、その欲望は商人資本的欲望と同じく終わりのない欲望である。だがそれは商人資本的欲望のように絶対的に外部を欠いているがためではない。このフェティシズム的欲望は、使用価値という決して辿り付けぬ外部を目的(end)とする欲望であるがために、終わり(end)を保有していないのである。このような強迫的欲望が産業資本の変態の下に拡がっている。

#### 4. 産業資本の危機

このようにして産業資本の変態の内は、使用価値という無規定な何ものかを価値増殖の失われた起源として、その変態を続けていた。この変態が順調に行われている限り、この変態運動は果てしがないもののように見えるだろう。資本家のフェティシズム的欲望によって生産された商品を、労働者がフェティシズム的欲望によって購買する。この円環の中で、資本は変態を繰り返しながら自らの「価値」を増殖させるのだ。しかしまたこの終わりなき円環には或る危機(Krise)が内在している。その危機が露わになるのが、使用価値がその固有な実定性と共に回帰してくる恐慌(Krise)という瞬間である。

恐慌とは何か。それは端的には、購買され得る以上の商品を資本が生産してしまう状況を示している。この時、資本は自らが生産してしまった最早「価値」として実現される事のない「無用」な使用価値としての商品に直面せざるえないのである。資本の変態が順調に行われていた際には不在の起源・目的としてその変態を



深層から支えていた使用価値という失われた外部が、この恐慌という危機の瞬間には、突然その変態を妨げる障害としてその存在を実定的に明らかにしてしまうのである。

恐慌というこの現象は、産業資本の変態運動をその内部から常に脅かし続けるそれ固有の限界である。資本主義とは一般に強調されるように生産のみを支配するシステムではない。資本主義は、労働者に賃金として可変資本部分を与える事によって、有効需要を創造する、消費を支配するシステムでもあるのだ。であれば資本主義がそれ自体として存続する時、それが行いするのは予め所与として与えられている「価値」を分配し、再び実現する事でしかないだろう。つまり資本主義がそれ自体として存立する限り、資本主義は自らの「価値」を増殖させる契機を欠いているのである(11)。しかし産業資本が終わりを持たないフェティシズム欲望に取り憑かれている時、それはそれ自体としては何処にもその「価値」を実現する有効需要のない商品を実際限に生産し続けようとするだろう。それ故、産業資本は常に自らの限界として、過剰生産＝恐慌という危機に取り憑かれているのである。だが歴史的事実としては、現在までの処この危機が真の意味で露わになる事はなかったように思われる。ではいかにして産業資本は、このような危機を馴致してきたのか。

ローザ・ルクセンブルク (Luxemburg [1921=1934]) は、それを非資本主義世界への侵略によってとする。資本主義世界はそれ自身の内には増殖した「価値」を実現させる余地を持っていない。それ故資本主義世界は自らの外部の非資本主義世界にその「価値」実現を可能にする場を求めなければならないのである。

ローザ自身は、このような非資本主義世界への「依存」という事の意味をあまり明確にはし

なかった。しかしこの非資本主義世界という概念を、非資本主義「国」に限定せずに資本主義国内部にも拡がる家庭や辺境という場にまで拡張するならば(12)、このローザの説は歴史的には妥当なものだと言えるだろう。資本主義は、確かに現在までの所、その世界総てを商品という視点の内に統合してきたわけではない。家庭に於ける女性の不払い労働は一般的な慣行であるし、また第三世界ではその労働に「正当」な賃金が与えられない事も珍しい事ではない。結局資本主義がその「価値」の増殖を、その外部との不等価「交換」、すなわち外部からの「価値」の「贈与」によって実現してきた事は否めない事実なのだ。

この事は産業資本が世界を自らの一元的視点の内に全体化しようとする資本である事と矛盾してはいない。いや寧ろ非資本主義世界への「依存」というこの事態は、産業資本のその全体化の運動と表裏の関係にあるものである。産業資本は商品を非資本主義世界に持ち込む事によって自らの剰余の「価値」を実現させるのだが、これは同時に非資本主義世界に商品という一元的視点を課す事によって、それを解体する事を意味しているのだ。結局、産業資本とは非資本主義世界への「依存」とその解体とを同時に行う資本なのである。

産業資本が直面する危機＝恐慌は、このように非資本主義世界への「依存」とその解体によって馴致され得る。そしてこれがおそらく産業資本が、現在までの所行っている運動なのだ。しかし、このような形での産業資本の稼働は、同時に自らが自らの存立の基盤である非資本主義世界を解体しているのもであって、その意味では産業資本の運動は、その「価値」増殖運動の終わりという或る「終局」を常にその内部に抱え持ったものでもある。そしておそらくこの

「現在」という時代は、産業資本の運動に内在するこのような「終局」こそが、或るリアリティと共に浮上しようとしている時代なのである。勿論、非資本主義世界は未だ無くなってはいないし、またそれはいつ無くなると言える種類のものでもない。しかし産業資本の全体化の運動の進展による非資本主義世界の相対的縮小に伴って、産業資本の運動に固有のものとして内在する一つの「終局」は今や我々の想像力の内に立ち現れようとしているのだ。

だがまた産業資本の「終局」はそのまま資本主義の終局を意味するわけではない。寧ろこの「終局」「以後」の世界では、資本はその変態形態をそれに適合するものに変えながら、かえってより強大な力を保有しているように見える。我々は、我々の「現在」の欲望を探索するために、次にこのような世界がいかなるものであるのかを見ていかなければならない。

## 5. 消費社会のファンタスマゴリー

資本の下に全体化され、「価値」増殖の契機を与える外部世界を欠いた世界、それがこの節で記述しようとする世界であり、また欲望の現在形の探索を目的としてきた本論がその到達点とする世界である。この世界では、資本は最早総体としての「価値」増殖をする事を止め、ひたすら再生産を繰り返すその変態の運動によって世界を貫いている。

産業資本は、過剰生産による「無用」な使用価値の露呈という危機＝恐慌を、非資本主義国の「依存」という方策で馴致していた。だが資本によって全体化されたこの「現在」の世界では定義上その危機を外部世界に「依存」する事で解消する事は出来ない。にもかかわらず資本はこの世界において、ますます多くの商品を生

産しながらその変態を維持しているように見える。ではこの世界で資本は、いかにして使用価値の露呈という危機を馴致しているのか。それは「信用」と「デフレ」という装置によってである。

「信用」とは何か。結局それは、最早誰によっても実現される事のない過剰な商品「価値」を、取りあえず実現された事にして、資本の変態を維持する装置であると言えるだろう。このような装置が利用されるならば、資本主義はそれ自体として成長しているかの見かけを得る事が出来るのだ。

しかし、ここで「信用」によって実現した事にされた商品の「価値」は、只見かけ上の実現として、世界総体の「負債」となるしかない。そして資本が「信用」によって成長の見かけを得る事が出来れば出来るだけ、この「負債」も膨大なものになってしまうのだ。それ故この「信用」という装置は恐慌＝危機の可能性を只先送りにするだけで、それに最終的な解決を与えるわけではないのである。

しかし「デフレ」が行われるならば、このような危機＝恐慌の可能性は最早永久に失われてしまう事になるだろう。危機＝恐慌は、最早それを実現するだけの「価値」が世界に存在しない商品が生産されてしまう事によって起こっていた。であれば、逆にこの世界に存在する「価値」に合わせて、商品の「価値」が切り下げられるならば、定義上全商品は購買され得、資本の変態が維持される事が出来るのだ。これが「デフレ」という事態において起こっている事なのである。

確かにこのような「デフレ」が繰り返し行われる限り、資本総体に於ける「価値」の増殖は起こりえず、ここで世界は「発展」を止め、「熱死」してしまったかのように見えてしまう

だろう。なるほど、それは確かにそうなのであるが、それはあくまで「価値」局面から見た上であって、使用価値に関しての話ではない。総体としての「価値」増殖が行われなくとも、個々の資本の利潤獲得（分配）競争に伴って行われる多くの技術革新は、より大量の財＝使用価値を産み出す事を可能にする。ここでは総体としての「価値」が「熱死」するにも関わらず、使用価値はますます大量に生産されてしまうのだ。であれば、この矛盾は或る一定の交換価値に、以前より多くの使用価値が割り当てられる事によって解決されるしかない。そしてこれは結局、世界が総体として「豊か」になる事を意味しているのである<sup>(13)</sup>。

しかしこの「豊かさ」とは一体何を意味しているのか。ガルブレイス (Galbraith [1984=1990]) は、現在ますます多くの財が生産される「ゆたかな社会 (the affluent society)」が展開される中で、その「豊かさ」の意味が失われつつあると言う。資本は、有用なモノを作り出す事を目的としているわけではない。資本にとっては、只モノが購買される事のみが重要であるのであって、ガルブレイスがそこで記述するように、その購買が広告やメディアという資本の装置を通して「有用性」とは無関係に行われるものであるとするならば、この時「豊かさ」とは最早「有用性」の増大を意味し得ないのである。

この時最早使用価値という概念は、まったく「無用」な概念として消え去ってしまうだろう。既に「価値」の増殖が行われていないのだから、使用価値は剰余価値をもたらす源泉として機能しもしない。また生産された商品は只ひたすら購買されていく事になるのだから、使用価値の露呈としての恐慌＝危機の可能性もここにはない。そもそも産業資本にとっても、使用価値は只剰余価値の源泉として不在の外部で有りさえ

すれば良かったのだが、今では資本の変態が継続され、ますます多くの使用価値が産み出されていく中で、使用価値はその不在の目的・起源としての機能をも失って、真に「無用」な概念として消え行ってしまうのである。

であればここで世界が「豊か」になるという事は、まずは資本が再生産を継続していく中で、単なる一つの結果を意味しているに過ぎないと言える。資本は世界を「豊か」にする事を狙っているのではなく、只結果としてそうするに過ぎないのだ。しかし、だがこの「豊か」さという結果の他に、資本が狙っていたものがどこにあるのかと考えてみても答えはない。交換「価値」の増殖が起こりえないこの世界では、資本は只々再生産を繰り返し自らの変態運動を継続するだけである。であれば、寧ろこの「豊かさ」とは資本がこの世界の内のあらゆるモノを貫き、その支配を貫徹する中で現れる資本の一つの現象形態であると考えべきであろう。ここで使用価値は、産業資本的世界のように予め失われた起源・目的としても機能する事はない。それは単なる一つの見かけとして、資本がこの世界に姿を現す一つの現象でしかないのだ。

であれば先にガルブレイスが用いていた「ゆたかな社会 (the affluent society)」という概念は、「豊かさ」の意味が失われたまま、ただモノだけが「よどみなく流れていく社会 (the affluent society)」と訳されるべきものであるという事になる。この世界で我々はますます多くの使用価値を手に入れる事が出来るだろうが、それは最早殆ど意味を失った使用価値であるしかないのだ。我々はつまり、資本が溢れんばかりに生産する多くの商品に取り込まれながら、その事の意味を理解する事が殆ど出来なくなっているのである。このように資本と我々が

存立する世界こそおそらくは「消費社会」と呼ぶ得るに相応しい世界である。

ではこのような「豊かな」「消費社会」では、一体欲望はいかに動いているのだろうか。その外部を失い資本によって全体化されたこの世界では、「量」としての交換価値は総体として増殖する事を止め、また「質」としての使用価値は完全に失われたものとなってしまう。そして我々の欲望もこの全体としての資本という一つの閉域の中に閉じ込められる事となるだろう。

確かにここでも個々の欲望は、商人資本的欲望がそうしていたように、時間・空間的差異性を利用して、個々の「量」を高める事も出来るだろう。しかしそれはあくまで或る「量」が増加すれば、或る「量」が減少するという、一つのゼロサム的全体の中の出来事ではない。また何よりもこの世界の中でそれぞれの欲望の活動を活気づける時間・空間的差異は、商人資本的世界のように所与として外部から与えられたものではなく、資本という全体によって形成されたものでしかないのだ。このような位置に欲望が置かれてしまっている時、個々の欲望の運動について議論する事は殆ど意味を失っている。最早個々の欲望は、それ自体としての個別の欲望であると言うよりも、自らによって自らの内部に差異を作りだしている一つの全体の運動を表出するものでしかないのである。

このような事情を理解するためには例えばモードという現象を見てみればよい。モードに乗る事で確かに個々の資本は多大な利潤を獲得する事が出来るのだが、しかしその背後にはモードを外れて「価値」を失った多くのモノが堆積している。そしてまたその個々の資本を動かす時間・空間的差異は、広告やマスメディアを通して資本という全体が作りだしたものでしかな

い。ここで資本が行っている事は、結局の所あらゆるモノを自らという一つの閉域の中に取り込み、そこに一定のリズムを刻み込む事によって、その支配を貫徹するという事なのである<sup>(14)</sup>。このような意味でモードというこの現象は、資本が外部を失い、総体としての「価値」増殖を行う事を止めた「消費社会」の一つの徴候的現象として理解されよう。

ここでは商品としてのあらゆるモノに内在するとされている「価値」とは、資本がその変態を行う際に個々のモノに刻印する支配の形式の一つに過ぎないと考えたほうがよいだろう。ここ「消費社会」において欲望は、あらゆるモノが資本の一部分として変態を続ける一つの全体の中で、この支配形式としての交換価値に貫かれながら、その全体の中に回収されているのである。最早「質」或いは「量」の純粋な上昇の運動としての「贈与」も、また使用価値という失われた外部を目的とする「交換」もここにはない。ではここでのモノの変態はいかなる名で呼ばれるべきものなのだろうか。それは、おそらく「模倣」と呼ばれるべきものである。

「模倣」とはいかなるものか。一つの具体例として、キッチュという現象に注目してみよう。キッチュとは何か。社会心理学者のA・モル(Moles [1977=1986])は、キッチュという現象を大量生産社会における商品の性質として把握した。有り余るモノが大量に生産される世界の中では、モノが購買されるためには、それが予め我々の欲望を「模倣」する形で生産されていなくてはならない。つまりここではモノに「消費者は王様だとする妥協」(Moles [1977=1986: 22])が刻まれているのである。そして、このようにモノが大量生産されていく時、我々の欲望もまた、我々の欲望を「模倣」しているはずのモノによって限界を与えられてしまう事にな

る。つまりここでは、確かにモノは我々の欲望を先取りし「模倣」しているのだが、そこで「模倣」される我々の欲望もまた予めモノによって与えられたものに留まってしまわざる得ないのである。ここに繰り広げられているのは、どちらが先行しているとも言えない我々とモノの欲望の相互「模倣」の世界なのだ。

このような話は、所謂キッチュと呼ばれるモノのみに限定されるべきものではない。寧ろキッチュというものを、モノが商品として資本の自己目的的运动の中で生産されるこの「消費社会」において、我々とモノが帯びざる得ない一つの性質であると考えたほうがよいだろう。それは結局モノの何らかの美学的価値を示すものではなく、この商品が大量生産される「消費社会」という世界の一つのあり方を示す言葉なのである。

このようなキッチュという性質が我々とモノを貫いているこの「消費社会」では、我々とモノの間にはその欲望の相互「模倣」を通して或る一つの紐帯が結ばれる事になる。「十九世紀の首都」としてのバリをさまよいつつ、商品への欲望の中に我々の生きる二十世紀の「根源」を垣間見たヴァルター・ベンヤミンという一人の卓越した思考者は、この紐帯を「感情移入」、特に交換価値への「感情移入」として考えた。

「基本的なのは、商品への感情移入が交換価値そのものへの感情移入であること。遊歩者はこうした感情移入の達人である。彼は金で買えるという考えそのものを散歩に連れ出す。」(M 17a, 2) (Benjamin [1982=1994: 136])

ベンヤミンにとって商品がその魅力を持つのは、その交換価値の中に自らの「感情」が立ち現れているからである。しかし、そこで我々が

商品に見いだす「感情」は、断じて個別的な我々の内面の感覚などではない。それは寧ろそのような個別性を消去された或る一般的・全体的な「感情」なのであり、彼はそれ故その「感情移入」によって獲得されるものを「全体的体験」と呼んでいる。

「人間に「全体的体験」を得させる何よりのものは、交換価値への感情移入なのではなからうか」(m1a, 6) (Benjamin [1982=1994: 352])

ベンヤミンにおいて「体験 (Erlebnis)」とは、二十世紀においては貧困を続ける一方の個別的な我々の「経験 (Erfahrung)」とは異なる、或る一般的性を帯びた一連の知識・情報・そして共感の総体の事を意味している。それは個人的なものを核としていないがために気散じな態度を導きやすいが(それは無為に通じている。(Benjamin [1982=1994: 351]) 参照)、まただからといって些細なものであるわけではない。(それはまたセンセーショナルなものにも通じている。(Benjamin [1982=1994: 357]) 参照) 結局それは、我々の個別的な「意識」をすり抜け、我々の存在一般の地平そのものに強く働きかける「無意識」的な「感覚」なのである。そしてそれ故「全体的体験」は、群衆の中、メディアの中、或いは戦争の中という我々の「個別」的「経験」を許さない「集団」的「体験」の中で獲得されるものであるのだが、ベンヤミンによればこの「金で買」うという我々の行為もこの「全体的体験」に通じる一つの重要な方法であった。それはおそらく、この「金で買」という行為が、我々と物の間の紐帯として貫く資本という一般性に参入する振る舞いを意味するからなのである。

購買行為において我々と商品との間に立ち

上がるこの幻影的で「全的」な「体験」を、彼はファンタスマゴリー的体験と呼ぶ<sup>(15)</sup>。このファンタスマゴリーの中で、我々とモノは、相互に「模倣」する欲望によって形成された或る全体の内に埋め込まれている。即ちここでの欲望とは、資本という一つの全体の中で、モノと我々を貫く交換価値という共通の属性の中を蠢くものなのである。それが結局「交換価値への感情移入」という言葉が意味している事なのだ。

それ故資本が総体として形成したこの世界を「疎外」という言葉から捉えるべきではないだろう。それは寧ろ我々とモノとの間に、一般的な「感情」の紐帯を回復させる或る「豊かな」世界なのである。ここで一度冒頭の『抱擁家族』において示されていた欲望の地平に、立ち帰ってみよう。そこで主人公俊介は「買物をしている相手」それも特に「見ず知らずの間柄」の者に対して「仲間」としての親愛の感情を抱いていた。それはおそらく、そこにおいて初めて彼が「不安定な苦しみ」を抱く「人間」という一般性へと回帰する事が出来たためであろう。そのような一般性の地平に辿りつくためには、そこで出会う人は寧ろ個別的な「経験」を欠落させた「見ず知らずの間柄」の人である方がよい。結局我々にとって、資本によって全体化されたこの世界とは、我々と他者との間に「人間」としての一般的な「同質性」を形成する「全的体験」の場であるのだ。

ここでの「人間」性とは、個人が日常を生きる事で獲得する個別的な内面性や個別の「経験」から切り離された、我々の生存という一般的な営みの地平に現れる何ものかを意味していよう。つまりは「見ず知らずの間柄」の者に対する共感であると言って良い。他なるものが単に他なるものとして留まるなら、そこに共感は生まれえない。他なるものが、それ自身が個別的な

ものとして存在する具体の地平を離れ、或る全体のなかで共に生の営みを送る「仲間」として立ち現れる地平、それこそが「人間」的なものの地平なのだ。しかしこの共感は今では生物学的な意味での人間のみならず、この世界に共に「生きる」諸々のモノに対しても向けられているものである。或いは寧ろそのようなモノと我々の間をつなぐ共感という関係性から、この「人間」的なものは作られていると言って良い。

この世界ではモノは、ますます我々に対して「やさしい」ものとなっている。先に見たA・モルは、キッチュは「人間的な尺度で作られて」(Moles [1977=1986: 60])いると言う。大量生産の中でモノが溢れるこの世界では、モノが購買されるためには、まずそれは「人間」的な快適さを保有しておかなければならないのだ。しかしまたその「人間」という尺度は我々に与えられるモノそのものによって構成された尺度でもある。「人間」的なものを先取りし続けるモノは今や、当の人間よりも「人間的な、あまりに人間的な」(Moles [1977=1986: 200])なものになってしまっているのだ。いや寧ろ、ここでの「人間」性とはモノが我々の欲望を「模倣」し、我々がモノの欲望を「模倣」するこの世界そのものが、人間とモノのその両者に刻印した或る共通性であると言う方がよい。ベンヤミンが商品に見ていた自らの「感情」、ここでモルが言う「人間的な尺度」、それらは結局全体的な資本の力が、モノと我々の欲望を貫く中で作り上げた資本の一つの実定的形象なのである。

先の『抱擁家族』の俊介は、おそらくこのような意味で買物に行く事で初めて「人間」的な感情を回復する事が出来ていたのだ。皮肉な事に、我々の欲望の現在形において、買物という場、資本の場こそが「ふと通り過ぎる人の顔に

おどろいたり、よく茂った濃い緑の樹木と葉を見「ふと頬をかすめて風」を感じ、何よりも「何か生きているという自由感」を感じる最も「人間」的な場であったのである。

我々はここで本論が目指してきた欲望の現在形に遂に辿りつく事が出来た。ここでの我々の欲望は全体としての資本の中で、予め「模倣」しているモノを「模倣」する一つの閉塞の中に閉じ込められているのである。このような我々の欲望のあり方を批判する事は、ここでの私の関心にはない。確かに、この世界はおぞましい。我々はここで「共感」によって形成された或る一つの全体の中で、そこからの逃げ道を失っているのだ<sup>(16)</sup>。しかしまた、それを一概に否定する事も出来まい。買物という場が、例えば俊介に与えていたそのささやかな幸福の権利を奪う事はおそらく誰にも出来ないのだ。この世界は我々の間、そして我々とモノとの間に一般的共感を形成し、そして我々に何かしらの「人間」的快楽を分泌する世界である。そしてこのような意味では、この「消費社会」は、我々自身がその欲望によって作り上げてた一つの「終局」の形である。我々が次に行わなくてはならないのは、このような我々の欲望の現在形が形成しているこの世界での我々の生の現在のあり方をより具体的に描き出す事であろう。この「現在」の世界に対する評価決定はその後の事であって良い。

#### 註

(1) その中で、欲望の問題を正面から取り扱った数少ない例外としては、(Deleuze & Gattari [1972=1986])がある。本論はその問題意識を受け継ぐものである。

(2) 特に (Baudrillard [1968=1980]) 参照。

- (3) その理論的骨子については、(Bourdieu [1980=1988, 1990]) 参照。
- (4) 現在の多様な知の一つの潮流としてのその中心となる書物を挙げる事は出来ないが、日本に於けるその代表的成果としては、(小森・紅野・高橋(編) [1997]) などが挙げられよう。
- (5) 勿論文化人類学の知見を参照としての事である。古典的著作としては (Mauss [1968=1973]) を参照。また「交換」と「贈与」の端的な区別としては (浅田 [1983]) が参考となる。
- (6) 「使用価値としては、諸商品は、なによりもまず、いろいろに違った質であるが、交換価値としては諸商品はただ色々に違った量でしかあり得ないのであり、したがって一分子の使用価値も含んでいない」(Marx [1962~1964=1972a: 76])
- (7) 前註参照。
- (8) この奇妙な欲望を我々はマルクスが「黄金呪物」と呼ぶ貨幣への欲望として、実は見慣れてもいる。そこでは交換価値としての貨幣は「購買手段」となる事、すなわち使用価値と「交換」される事を禁じられ、ひたすらそれ自体として欲望されるのだ。(Marx [1962~1964=1972a: 235]) 参照。
- (9) 「我々の場合、<sup>\*</sup>物象へと化す或るもの<sup>\*</sup>は、いわゆる<sup>\*</sup>心象<sup>\*</sup>でもなければ、単純に<sup>\*</sup>主体的なもの<sup>\*</sup>でもない。それでは、それは一体何か? さしあたり形式的・一般的に答えておけば、それは一種独特の「関係」である。」(廣松 [1996: 244])
- (10) 例えばG・ルカーチ (Lukacs [1923=1991]) は、労働者に資本主義の総体性を意識化しうる認識論的利権を与えている。しかし意識はどうあれ、欲望の観点から考える限り、労働者もまた資本家と同様、以下のようなフェティシズム的欲望に動かされざる得ないのである。
- (11) 剰余価値は一体誰が実現するのか、この問題を巡って、『資本論』第二巻の論述が未完となっているという事情も重なって、多くの議論が積み重ね

られている。(その詳細については(市原 [1990])、(土田 [1990]) 参照。) 本論でそれを詳察する事は出来ないが、私は次に挙げるローザが言うように、資本主義内部にはそれを実現する者はいないという考えが基本的には正しいものだと考えている。

(12)マルクス主義フェミニズムや、世界システム論はこのような視点からローザの説を最近捉え返している。マルクス主義フェミニズムについては(足立 [1994])、世界システム論の端的なまとめとしては(Wallerstein [1983=1985])を参照。

(13)勿論、直線的に話がそう進むわけではない。まず価格と価値を峻別するならば、話は極めて複雑なものとなるだろうし、またそれをとりあえず置いておくとしても、社会が総体として「豊か」になると言う事は、直接的には資本がより大量の使用価値を支配できる事を意味し、我々が「豊か」になる事を意味してはいない。だが、少なくとも以前にはより少数のものにしか与えられていなかった財が、後には多数の者に解放される事になるというこの世界の一般的傾向を見る限り、このよ

うな議論の単純化はその妥当性を損なうものではないと思われる。

(14)M・ダグラス (Douglas & Isherwood [1979=1984]) は、我々の消費活動を或るリズムを刻む儀礼的行為として捉えている。それはおそらく妥当な見方であるが、彼女の議論はこの商品のリズムが或る形態を取る資本そのものによって作りだされたりリズムである事、そしてそれを分析するためにはそのような資本が存在する世界の構成そのものを見なければならぬ事を見落としている。

(15)「ファンタスマゴリーとは、体験にとっての志向的对象である。」(m3a, 4) (Benjamin [1982=1994: 358])

(16)そしてこのおぞましさには、また別の事情もある。本論ではこの世界のあり方を、「共感」という言葉から少なくとも表面上はポジティブに描き出してきたのだが、それはまた裏面では「公平性」という超越的視点が失われ、「人間」がその一般的な生存の地平で闘争を繰り広げる世界でもあるのだ。

## 文献

- 足立真理子 1994 「ローザ・ルクセンブルク再考」 田村雲供、生田あい (編) 『女たちのローザ・ルクセンブルク』 社会評論社
- 浅田 彰 1983 「モースからニーチェへ 交換主義批判のためのメモワール」 『現代思想』 vol.11-4
- Baudrillard, Jean 1968 *Le system des objets*, Editions Gallimard=1980 宇波 彰訳 『物の体系』 法政大学出版局
- Benjamin, Walter 1982 *DAS PASSAGEN-WERK*, Suhrkamp Verlag=1994 今村仁司、三島憲一他訳 『パサージュ論 III』 岩波書店
- Bourdieu, Pierre 1980 *LE SENS PRATIQUE*, Editions de Minuit=1988、1990 今村仁司 (他訳) 『実践感覚』 I, II みすず書房
- Douglas, Mary & Isherwood, Baron 1979 *The world of Goods*, Basic Books=1984 浅田彰・佐和隆光訳 『儀礼としての消費』 新曜社
- Deleuze, Gilles et Gattari, Ferix 1972 *L'Anti-OEdepe*, Editions de Minuit=1986 市倉宏裕訳 『アンチ・オイディプス』 河出書房新社
- Galbraith, John Kenneth 1984 *The Affluent Society*, Houghton Mifflin Company=1990 鈴木哲太郎訳 『ゆたかな社会』

岩波書店

廣松 渉 1996「物象化論の構図」『廣松渉著作集 第十三巻』岩波書店

市原健志 1990「マルクス以後の再生産論の展開」富塚良三・井村喜代子『資本論体系第4巻 資本の流通・再生産』有斐閣

小島信夫 1988『抱擁家族』講談社

小森陽一・紅野謙介・高橋 修（編）1997『メディア・表象・イデオロギー』小沢書店

Lukacs, Georg 1923 *Geschite und Klassenbewußtsein*, Der Malik-Verlag=1991 城塚 登、古田 光訳『歴史と階級意識』白水社

Luxemburg, Rosa 1921 *Die Akkumulation des Capital*, Frankes Verlag=1934 長谷部文雄訳『資本蓄積論』（上）（中）（下）岩波書店

Marx, Karl 1962～1964 *DAS CAPITL*, KARL MARX・FRIEDRICH ENGELS WERK 23-25, Dietz =1972a 岡崎次郎訳『資本論（1）』大月書店

——— 1962～1964 *DAS CAPITL*, KARL MARX・FRIEDRICH ENGELS WERK 23-25, Dietz =1972b 岡崎次郎訳『資本論（7）』大月書店

Mauss Marcel 1968 *Sociologie et Anthropologie*, Presses Universitaires de France=1973 有馬亮他訳『社会学と人類学』弘文堂

Moles, Abraham 1977 *Psychologie du Kitsch*, Drenoel/Gonthier=1986 万沢正美訳『キッチュの心理学』法政大学出版局

土田和長 1990「わが国における再生産論争」富塚良三・井村喜代子『資本論体系第4巻 資本の流通・再生産』有斐閣

Wallerstein, Immanuel 1983 *HISTORICAL CAPITALISM*, Verso Editions=1985 川北 稔訳『史的システムとしての資本主義』岩波書店

（さだかね ひでゆき）